

原典で読む 外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社欄宣



第十七回 ミッドフォード『英国外交官の見た幕末維新』(中)

「徳川慶喜が、切腹は野蛮な風習で時代遅れだと言ったのは誤りである。現在に至るまで、それは節操と名誉を守る手段である」

ミッドフォードは、多くの日本人との交流がありました。この本の中で結構詳しく紹介している人物が何人かいます。その一人が土佐藩主の山内容堂です。

「土佐の隠居容堂公は、当時の激動の時代に現れた多くの著名な人物の中でも特に傑出した人物であった」

「彼は高い知性を備えた先見の明のある人物で、他の大名よりはるかに物事の政治的判断に優れていた」

江戸時代は徳川将軍家が幕府を主宰していましたが、「三百諸侯」と言われる

ように、全国各地に領地と領民を持つ大名がいました。容堂は中でも「四侯」と呼ばれ、ペリー来航以来の幕末政治史に名を刻んだ大名の一人でした。

幕末史は非常に複雑ですが、容堂との関わりで「あらずし」を述べると、最初はペリー来航を機に、海防強化を目指す藩政改革を推進して注目されます。次に、開国か鎖国かで揺れる中で第十三代将軍・家定が没し将軍継嗣問題が起ると、徳川斉昭の子、一橋(徳川)慶喜を推す老中阿部正弘、松平慶永、島津斉彬、伊

と。病に伏した容堂の要請で、医師のウイリスと共に京都で会いました。枯れ行く容堂の様子をこう記しています。

「前藩主(容堂)はきわめて礼儀正しかったが、日本の身分の高い紳士にとっでは、このような礼儀作法は天性のようには身についたものになっていたのである。彼は、そのうえ、明らかに人をひきつける魅力を用意しており、それは高位の者としては、まれなことであって、彼が諸侯の仲間の中でも特に影響力を持っていたのは、そのためであった。彼は我々を温かく迎え、急いで来たことに対して深い感謝の言葉を述べた。彼は非常に疲れていて、病気が重いらしく、私のような専門外の目で見ても、死にかけているように見えたので、訪問を早めに切り上げることにした」と。



また、ミッドフォードは最後の将軍・徳川慶喜についても、詳しく書いています。慶應三年五月、大坂城でパークス公使らと共に将軍に最初の謁見をしますが、この時の印象は非常に好いものでした。

「最後の将軍徳川慶喜公は、確かに傑出した個性を備えた人物であった……西洋人の目から見ても立派な容姿を備えた人間であった。端正な容貌をして、眼光は爛々と鋭く、顔色は明るい健康的な才

リーブ色をしていた。口はきつく結ばれていたが、彼が微笑むと、その表情は優しくなり、きわめて愛嬌にとんだものとなった」

他にも、
「きわめて人を引きつける魅力」
「生来の非凡な性格と思いやりのある礼儀正しさ」

と表現しています。
しかしながら、この謁見の四カ月後に大政奉還となります。ミッドフォードが再び慶喜に謁見したのはその二カ月後、慶喜が将軍職を辞して京都から大坂城に移った時のことです。最初の謁見から半年が経っていましたが、慶喜は半年前とは別人のようになっていました。

「この五月に威厳に満ちた態度で我々を迎えてくれた凛々しい誇り高い貴族とは全く別人のようだった。彼が経験した多くの困難や悲しみや侮辱が彼の表情にはつきり現れていた。彼は、天皇の聖域の間近で内戦が行われるのを避けようとして、愛国的動機から京都を離れたのだという古臭い言い訳を繰り返しただけだった」

さらに、この直後、鳥羽・伏見の戦いとなりませんが、慶喜は大坂城を脱走して江戸に帰ってしまいます。その慶喜に、ある幕府高官が進言したことが記されています。

達宗城らの一橋派に与します。しかし、紀州藩主・徳川慶福(十四代将軍・家茂)を推す井伊直弼が大老に就任し、継嗣問題に決着がつくと、一橋派の弾圧が始まり、容堂は謹慎を命じられます。「安政の大獄」です。しかし、「桜田門外の変」で井伊大老が誅され、幕府の権威は失墜。容堂が謹慎中の二年半に政情は大きく変化し、攘夷派が朝廷に大きな影響力を持つようになります。文久二年の謹慎解除以降は、慶喜や慶永らを後援して幕政改革と公武周旋に尽力します。

その後、「八・一八政変」「禁門の変」「第一次長州征伐」「第二次長州征伐」「薩長連合」「薩土盟約」など時代はめまぐるしく動いて行く中で、幕府政治の限界が鮮明になり、容堂は慶喜に「大政奉還」を建白します。容堂は天皇を中心とする新たな政治体制の中でも、徳川家が実権を握ることができるよう動きました。容堂にとっては、あくまでも藩祖・一豊以来の徳川家の恩顧に應えることが第一義であったように思われます。武市半平太をはじめ藩内勤王派を肅清したこともあり、後世の日本人には人気がありません。それでも、外国人から見れば立派に見えたようです。ミッドフォードが容堂に面会したのは、「王政復古」「辞官納地」「鳥羽・伏見の戦い」を経て、慶喜が江戸城に帰った二カ月後の慶応四年三月のこ

「敗北した将軍が江戸に戻って、先祖代々の城で、無事にその日を送っていた時、若年寄の一人であった堀内蔵頭が彼のもとに来て、尊い家名を受けた汚辱を拭い去るただ一つの方法として切腹することを強く勧めたのである。彼は、その言葉の真剣なことを証するため、自分自身も切腹すると言明した。将軍は、それを笑い飛ばして、そんな野蛮な風習は時代遅れだと言ったことである」

そして、この進言をした堀は、この後切腹して名誉ある武士の本懐を遂げます。この出来事についてミッドフォードはこう書いています。

「徳川慶喜が、切腹は野蛮な風習で時代遅れだと言ったのは誤りである。現在に至るまで、それは節操と名誉を守る手段である。私が昔よく知っていた薩摩の西郷大将の一八七七年の反乱における死に方をよくみるがよい。また、旅順港の英雄で、私の古い友人であった勇敢な乃木将軍が二年前の一九一三年に自殺した時のことをよく見て欲しい。彼は敬愛する主君天皇陸仁の死を深く悲しみ、天皇の後を追って死を選び、忠実な夫人も彼と共に死んだのである」

ミッドフォードは慶喜の心の変化を捉える中で、命よりも名誉や忠義を重んじる日本人の精神性を実に高く評価しています。